

# 「夢に見ゆ(る)」とうたうことは

真下 厚

## 序

万葉集には夢に関わる歌が百余首見出される。それらの殆どが男女の相聞の歌であり、また、後期万葉に偏在するとされている。

さて、そのような歌のなかで、「夢に見ゆ(る)」とうたうものがその多数を占めていることが注意される。これらは相手にその姿が夢に見えたとうたいかけたり、夢に見えたことから引き起こされる感情や行動などについてうたいかけようとするものである。さらに、問答歌には「夢に見えきや」と問いかけるものがあり、「夢に見ゆ(る)」とうたうことをめぐって恋歌の贈答が行われていることが知られる。いうならば、「夢に見ゆ(る)」とうたうことが夢に関わる歌の中心を占めているのである。

ところで、なぜ「夢に見ゆ(る)」とうたうのであろうか。また、このようにうたうのはどこにその源流があり、そして歌がそれをどのように組み入れているからなのであろうか。

本稿では、万葉相聞歌の一類型となっている「夢に見ゆ(る)」の歌をめぐって考えてみたい。

「夢に見ゆ(る)」とうたうものの諸相を確認することから始めたい。

これらの歌には、相手が夢に見えるのはその相手が恋うからだとするものと自分がその相手に恋うからだとするものとの二通りのうたい方があるとされる。

1 我が背子がかく恋ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねらえず  
けれ  
(巻四・三六)

2 思ふらむその人なれやぬばたまの夜ごとに君が夢にし見ゆる  
(巻十一・三六)

3 我妹子がいか思へかぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる  
(巻十五・三四)

これらは前者の例である。1は、あなたがこんな恋うからこそ夢に見えて眠られないのだとうたうもの。「夢に見えつつ寝ねらえずけれ」は、そのような夢の会いによって自らの心も誘われてゆき、そのために眠られないという事情をうたっていると考えられる。2は、その姿が夢に見えることについて、自分を思っているというそ

の人なのかと疑う。やはり先のような考え方が前提にある。この歌では夢に見える人物を「君」とうたうところが注意される。後述するような、夢がひとつの真実であるとする万葉びとの見方がここにも窺われよう。3は遣新羅使人歌の一首で、羈旅歌に属するものであるが、見た夢についてのうたい方は相聞の恋歌と重なる。さて、これらのものに対して、

4 朝柏潤八川辺の篠の目の唄ひて寝れば夢に見えけり

(卷十一・三五)

5 旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ我が片恋の繁ければかも

(卷十七・三三)

6 荒磯ゆもまして思へや玉の浦離れ小島の夢にし見ゆる

(卷七・三〇)

は、後者の例である。4は、相手に心が強く向かうことよって夢に見え、夢の会いが果たされたとうたうもの。5は、家持の越中国下向に際して大伴坂上郎女が贈った歌である。叔母・甥の間柄ではあるが、歌の贈答においては男女の恋に倣うこと、同性同士の場合と同様である。「そのように、恋の贈答に倣って「我が片恋の繁ければこそ」「君しも継ぎて夢に見ゆ」とうたうのは、こちらが相手に恋うゆえに夢にその姿が見えるとする捉え方を前提としているからである。6は巻七「羈旅作」の中の一首で、恋歌ではない。夢に見える対象として島を取り上げたという点でも特異である。ここで、こちら側が玉の浦の小さな離れ島に強く心魅かれることを表すことよって、この島を讃めた土地讃め歌となっている。うたい手は離れ島を中心とした玉の浦の世界を夢に見ているというのである。これは夢にうたい手の魂がその体を離れ出て玉の浦の世界に依

り憑き、その世界が見えてくるというのであろう。決して、恋うことよって、その世界をこちら側に引き寄せようとするのではないのである。5でも、「旅に去にし君」が夢に見えるというのは、うたい手の魂が旅にある相手に依り憑いて、その姿が見えることなのであろう。

したがって、このようなものは、原理的には、相手にとってもその姿が夢に見えることになる。

7 すべもなき片恋をすこのころに我が死ぬべきは夢に見えきや

(卷十一・三三)

のように、「夢に見えきや」とうたうのは、こちら側が強く恋うこととで遊離した魂が相手に依り憑き、そのことよって相手にはこちらの姿が夢に見えるということを踏まえての問いかけである。ここにおいて、相手とこちらとの立場を入れ換えれば、前者の場合、すなわち相手が恋うゆえにその姿がこちら側の夢に見えるということになるであろう。佐藤和喜氏の指摘されるように、これら両様のうたい方は遊離魂という考え方において同じなのである。5のような場合、うたい手の夢に相手の姿が見えているとき、依り憑かれた相手の夢にもうたい手の姿が見えていなければならない。もちろん、現実には双方が同時に夢を見ていたということとは殆どあり得ない。このような観念が成立していたということである。したがって、そのようなずれがあることをめぐって歌の贈答が行われることにもなる。

ところで、このような、夢に相手が見えることについての二通りの捉え方は、いずれも夢の意味を解こうとすることと関わって頭在化している。1・3・4・5・6などは相手が夢に見える理由を解

くことと関わって、また、2は夢の「君」の素性を解くことと関わって。

したがって、歌の構造においても、「夢に見ゆ(る)」という事象を叙述する部分と、2・6では「——や」、3・5では「——か」「——かも」のような疑問的条件句、1・4では「——ば」などのような確定条件句とから、それぞれ成る。そして、このような疑問的条件句、確定的条件句の部分は夢の意味を解き、その意味づけをしようとするものとなっている。

しかし、一方で、このように夢の意味を解こうとすることを、表現のおもてに立ててうたわれない歌もある。

8 秋の夜の霧立ち渡りおほほしく夢にそ見つる妹が姿を

(巻十・三三〇)

この歌、隴ろにあなたの姿を夢に見たとうたうのみで、なぜ夢に相手の姿が見えたのかを解こうとするかたちでうたつてはいない。ただ、夢に見えたことをうたい手がどのように受けとめたものとなっているかは推定できる。

9 夕月夜旣闇のおほほしく見し人故に恋ひ渡るかも

(巻十一・三〇〇)

のような歌からすれば、夢にほんやりと姿を見たゆえに自らの魂が誘い出されてくるというのかもされない。9がうつつでの出会いであるのに対し、8は夢の会いであって、やや異なる。とはいえ、うつつの世界も夢の世界も万葉ひとにとつとも実在する世界であって、うつつでの隴ろな出会いも夢での隴ろな出会いも恋する心を一っそう強く誘い出してくるところにおいてはほぼ同様であろう。このようにみることができるよう、この歌、夢に見た事象そのも

のが投げ出されているわけではない。

10 常ならぬ人国山の秋津野のかきつばたをし夢に見しかも

(巻七・三三〇)

この歌の方が、かきつばたを夢に見たという事象のみをうたう点で、より素朴である。この歌は巻七譬喩歌に分類された一首で、この歌、そしてこの夢を解くことは歌を贈る相手に委ねられているようにみえる。

## 二

さて、このように夢に見たことを相手にうたうのはなぜか。またこのような歌が夢の事象と夢解きとを併せうたうのはどうしてなのか、その源流をたどって考えてみたい。

記・紀・風土記、さらに『日本霊異記』には夢にまつわる説話がいくつかみられる。このうち、記・紀にみえる夢の説話が天皇にかかわるものであることについては、西郷信綱氏の論じる<sup>(7)</sup>ところであるが、これはそれらの書物としての性格によるものである<sup>(8)</sup>。このような説話のなかから先の問題とのかかりを求めてみることにしよう。

神武記には高倉下が夢で建御雷神から太刀を授かり、カムヤマトイハレビコに献上した説話がある。夢は神が現われ、働きかけてくる世界であった。その夢で神は倉の天井に穴をあけてそこから太刀を落とそうと託宣する。朝、倉の中には夢の通り太刀があったとしている。ここから窺われるごとく、夢に見える事柄は真実なるものであった。だからこそ、逆に、悪い夢を見た場合、それから何とか逃れようとする。平安時代以降、「夢違へ」という呪法が確認でき

るが、こうした呪法の存在は夢の内容が真実なるものとしていかに重いものであったかを思わせる。なお、古橋信孝氏は、

11 都路を遠みか妹がこのころは祈ひて寝れど夢に見え来ぬ

(巻四・亥三)

の歌について、夢に見えないという悪い結果を二人の距離の遠さのせいにしてその事実から逃れようとしたものと解されたが、「夢違へ」の呪法を支える心意は上代にあっても存したことであろう。

『日本霊異記』中巻第二十縁に、夢に娘の悪い相を見た母親が誦経をしてその災いから逃れたという話が載る。この説話では、仏教の功德を解くために、「夢違へ」の呪法が誦経というかたちになっているが、ここにもその前提として夢の真実性があるといえよう。

このような夢の真実性を保証するものは現実との符合であった。しかし、今日の我々がそうであるように、結果として現実のできごとと合わない夢も数多くあったはずである。けれども、夢を真実なるものと受けとめている人々にあつては、とりわけ奇異なる夢、不可思議なる夢が解かれ、その後起こった特別なできごとと直面してそれに暗合する夢のみが記憶の彼方から喚び起こされ、そのできごとと結合することによって絶対化されて、その真実性が繰り返して確認されたことであらう。

しかし、夢が真実なるものであるといっても、人々がそれに信頼を寄せて安定するというものではない。それどころか、このような夢の世界は人間の意志も理解も及ばない、不可解で、不可思議なるものであり、望ましいことであれ、望ましくないことであれ、人々の心理を不安定な状態に追い込むものであったともいえる。

垂仁記には、天皇が巫女的な性格を有するサホビメの膝枕(これ

が「神床」に相当する)で眠っていて、自分の顔に雨が降りかかり、首には蛇が巻きついた夢を見る話が載る。この夢は、「異夢」とされるように、夢を見た天皇にとつて解きたい不可解なものであり、神の世界にかかわることのできる巫者であるサホビメによつてはじめて解かれるものであった。(先の『日本霊異記』中巻第二十縁では母親自身が解くこととなっており、専門的な呪者が解くものになってはいないが、これは母親が家の司祭者としての性格をもっていることによるものである。)この夢解きによつて、反乱と天皇の暗殺とを予兆するものであることが明らかとなるが、このように、夢はまた現実の兆となる点において不可思議なものであった。このような夢は夢を見た者自らの解き得ないものであるから、不可解なことと受けとめられ、その結果、非常に不安定な心理状態に陥ることになるのである。いわば夢にとり憑かれ、憑き動かされることとなる。

このような状態は南西諸島の民間巫者たちの成巫体験からも窺われることである。たとえば、沖縄宮古島の民間巫者根間ツル子氏は成巫の過程においてたくさんの不可解な恐ろしい夢を見、そのうちのいくつかについてはその意味を解くことができたが、まだ意味のわからぬ夢も多く、一生かかつてそれらを解いてゆかねばならないのだと言われている。<sup>(11)</sup>そして、このように、夢を解く行為は、伝承世界のなかにおいて、それに意味を与えることによつて、夢を見た者に安定化の方向に向かわせようとするのだと考えられる。もちろん、このように夢解きがなされてもなお、現在または将来に起こる現実との符合が確認されなければ十分な安定ははかられない。

また、『日本霊異記』上巻第十八縁には、持経者が観音悔過の時に夢で法華経の一字のみを誦持できないことについて託宣を授かる

という説話が載る。この説話では、「有人曰」のように、誰ともわからない者が現われて託宣を下す。この人物が神・仏や特定の人物とされていないという点で完全に夢解きがなされているとはいえないが、夢のなかにおいてすでにある程度の夢解きがなされているといえよう。夢で託宣を授かるというのは、夢を見る者が神・仏によって特別に選ばれた者であることを表している。しかし、そうであっても、もちろん、この夢を見た者はまったく安定的な状態にあるわけではない。「従夢醒驚而思怪」のように、持経者は、奇異なること、不可思議なことと思ひ、その託宣のままに自らの前世の居所を訪ねようとする。夢に憑き動かされて(あるいは仏の心に憑き動かされて、といってもいいかもしれない)、現実との符合を求めることによってその夢を解こうとするのである。

なお、このような、神・仏による託宣を夢に見るとした場合、さらにその託宣に従い、その実現を果たさねばならなかった。これは当然といえはいえよう。神・仏は人間を超えた存在であるから。しかし、このような託宣は、現実にはそれを受ける本人にとつて困惑するような内容のものもあつたに違いない。たとえば、奄美・沖繩の民間巫者たちがいったんは拒絶するような神の祭祀への命令のように。けれども、それは神の意志であるから抗しがたくその実現を図らねばならなかった。仲哀記の説話では神の託宣を疑つた天皇は命を落とすこととなる。

さらに、夢とその意味づけとの関わりからいえば、夢を見た者自身がその時期に伝承されていた俗信によって夢を解き、意味づけをする場合がある。時代は下がるが、『源氏物語』若菜下巻には、猫が現われ、それを女三宮に奉ろうとしたという柏木の夢の話が載

る。ここでは、夢解きの人を招くなどして、ことさらに解こうとはしていない。当時、動物の夢は相手の妊娠の兆と解く俗信の類があつたらしく、ここではそれによって夢を見た柏木はある程度の夢解きをしているように設定されていると思われる。しかしながら、そうであっても、「おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ」とするよう、柏木はなお夢を解き得ない部分を残しているように叙述されている。たとえば、夢解きのことわざなどが伝えられていたとしても、自らの現実とどのように関わるかということは複雑な問題であつて、そのすべてを解き明かすことはできないであろう。心理的な不安定は、程度の差はあれ、なお残ることになる。

このように、不可解、不可思議な夢を見た者はその夢に憑き動かされ、現実との符合を求めて動かされていったように思われる。そして、現実との符合が確認される瞬間、その夢の真实性は実感されることになろう。

このように、現実との符合を求めて働きかけをする説話のなかで、その夢に関わる人物にその内容を語るといふものがある。

『日本霊異記』下巻第十六縁は、寂林という法師の夢に乳房が張つて苦しむ女の姿が見え、彼の問いに対し、女が答えてそのわけを知るといふ話である。彼は、女が生前幼子に乳をやらす飢えさせた罪によって病苦を受けているのを知る。そして、その罪から逃れるためにはその子の許しが必要なのだといふ求めに応じ、その子供にあたる人物を探し出してその夢の内容を語る。子はこのことを怨まず、仏像造立・写経によって母の罪を贖つたところ、寂林の夢に再びその母親が現われて罪から免れたことを告げたといふものである。この説話において、夢に見えた母親が語ることは神の託宣などでは

ないが、寂林は目覚めて不思議に思い(原文には「目夢驚醒 独心怪思」とあって、これは夢にとり憑かれた不安定な状態を表しているといえよう)、夢のままにその里、その子供を訪ねている。そして、彼はその人物に、「述於夢状」とあるように、夢の内容を語るのである。こ

れは、その夢が現実と符合することを確認し、夢の意味を解こうとすることであった。そして、それは夢での母親の求めを実現させてゆく働きかけともなっている。同中巻十五縁にも法会の導師を務める羽目となった乞者の夢に牛の姿となったその家の主人の母親が現われて自らの身のいわれを告げ、これを聞いた乞者は翌日の講座でその夢のさまを語ったという説話が載る。この説話では、先の説話のように夢に関わりある人物を訪ねるというものではないが、「心内大怪」と思った夢をその子供にあたる願主に語って、現実との符合を求め、その真实性を確認することとなる。夢での母親の話がその状況に合うことに加え、その牛が母親の語る通りに座に伏すこと

によって、一座の人々はその真实性を確信するのである。上代の説話にみられる、このような夢の内容をそれに関わりある者に対して語るといふかたちは、中古の文学においても恋に関わって「夢語り」と呼ばれており、ひとつの習俗の形式として存していたと考えられる。夢を語るところには、不可解で不可思議な夢を真実なるものとして受けとめつつも、その安定化のために現実との符合を求めようとする心的状態が関わっている。このようなところに、夢を語るというかたちが胚胎していると考えられる。

万葉における「夢に見ゆ(る)」の歌は、このような、夢を解こうとし、現実との符合を確認せずにはいられないという方向性、あり方を組み入れているのではなからうか。

### 三

さて、このような観点から、万葉歌の「夢に見ゆ(る)」の歌をみるとしよう。

12 生きてあらば見まくも知らずなにかも死なむよ妹と夢に見え  
つる (巻四・六二)

は、夢のなかでの相手の出現・訴えかけをうたうもので、夢における神の顕現・託宣の場合に準じるものといえる。夢に突然相手が見られることは、それだけでこちら側を不安定な心理状態に追い込むこととなろう。しかも、その訴えかけは「死なむよ妹」というもので、うたい手にとってこれは、「なにしかも」とあるように、非常に不可解なことであった。この夢は解かれねばならない。相手のなかに符合する事象を求めて問いかけようとする。この歌は大伴坂上大嬢が家持に答えて贈った歌で、この歌自体のレベルは、後述するように、別にあると思われるが、その基底にはこのような夢を解こうとする方向性、あり方が想定できよう。

13 我が思ひを人に知るれや玉くしげ開き明けつと夢に見しゆる  
(巻四・六二)

この歌は、「玉くしげ開き明けつ」というさまが夢に見えるところたい、それを「我が思ひを人に知れるや」と解こうとする。これは、前節にあげた、夢を見た者がその当時に伝えられていた夢解きのことわざなどによってその夢を解こうとする場合に当たるものである。しかし、そのようなことわざなどに照らしてみても、現実における相手と自分との間の個別的な状況に完全には符合しない。

天武紀元年六月条には天武が黒雲の異変を見て自ら卜占を行った

という話が載せられているが、彼はその異変を解いて「天下両分之祥也。然朕遂得天下歟」といったという。天武はその異変を卜占の次第にしたがって「天下両分之祥」と読み、現実の個別的な状況に合わせて「朕遂得天下歟」と解いた。彼は巫者としての位置に立ち、またその卜占で解き示された内容は巫者の權威によって支えられることになる。また、允恭紀二十四年条にも温かい汁物が氷するという異変について卜占をさせたという話が載せられている。時に卜者は卜して「有内乱。蓋親々相奸乎」といったという。これもやはり卜占の次第にしたがって「有内乱」と読み、その状況に合わせて「蓋親々相奸乎」と解くといふかたちをとっている。

五九一番歌において、夢解きのことわざ・俗信は、いわば、これらの卜占の「天下両分之祥」・「有内乱」に相当し、「我が思ひを人に知るれや」は「朕遂得天下歟」・「蓋親々相奸乎」に相当するといえよう。もっとも、天武の卜占の解き方はこの歌にみえる夢解きに比して、「天下両分之祥」と「朕遂得天下歟」との間の飛躍の大きいことが異なる。また、このようなものは、巫者、個別的な状況のそれぞれによって解き方が異なる可能性もあろう。

このように、個別的な状況に合わせて解かれるわけであるが、なお現実との符合が確認されねばならない。そのために相手にうたいかけねばならない。「夢に見ゆ(る)」の歌はこのような方向性を組み込んでいる。

ところで、この歌においてもそうであったが、「夢に見ゆ(る)」の歌には「——や」「——か」「——かも」のような疑問的条件句をもつものが多いこと、第一節で述べた通りである。「夢に見ゆ(る)」という事象を叙述する部分とこの疑問的条件句とから成っている

が、これは人間の意志も理解も及ばない夢の世界の景とそれに対する巫者の立場に立っての夢解きの部分であるといえる。古橋信孝氏は〈謡〉そして〈歌〉が「景(神の意志のあらわれ)十心(神の意志の解釈)」という構造をもつことを論じられたが、「夢に見ゆ(る)」の歌のこのようなあり方もこれに対応しているといえる。

さらに、この夢解きの部分は、先に指摘したように、前述の卜占の場合の「朕遂得天下歟」「蓋親々相奸乎」の部分に相当すると考えられる。そして、疑問の助詞「か」「や」はこれらの助辞「歟」「乎」に意味的にも重なっている。「か」と「や」とはその疑問の程度やあり方において異なるといわれるが、これらの歌では夢解きにおける断定的な表現を避けることを表しているようにみえる。このことは自然・社会の異変についての卜占の漢文表現においても共通しているが、このような人間を超えた世界の解釈は断定的な表現を避けて推量表現や疑問的表現がとられるとみえる。

「夢に見ゆ(る)」の歌のこのような構造のうちに、上代における夢と夢解きの問題が深くとどめられている。

さて、「夢に見ゆ(る)」の歌の基底に不可解、不可思議な夢を解こうとする方向性を含み込んでいると考えてきたのであるが、万葉集に残された歌でみる限り、儀礼と関わる挽歌において、相聞の歌とほぼ同時期、あるいはやや早いかとも思われるものとしてその例が見出されるのは意義深いものである。

14うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝嘆く君 離り居て

我が恋ふる君 玉ならば 手に巻き持ちちて 衣ならば 脱く

時もなく 我が恋ふる 君そ昨夜 夢に見えつる(巻二・三)

これは、天智挽歌群のうちの一、一首、「崩時」に「婦人」がうたった

ものである。いつもいつもひたすら心魅かれる君が昨夜の夢に見えたというもの。殯宮に籠る女性たちの夢に亡き天皇が見えたというのであろう。それが招魂儀礼を行うことと直接的に関わるものであったとしても、夢の不可解、不可思議さによりたれる衝撃は強くあつたのであるまいか。相聞の歌の場合、後述するように、夢から生じる心的状態の方向性というかたちを基底に置きつつも、贈答の遊戯性のなかで捉え返されてくる。挽歌の場合、死の儀礼と深く関わるゆえにより直接的であつて、あるいはこうした歌において「夢に見ゆ(る)」の歌は生み出されたのかもしれない。

ところで、この歌では「夢の事象十夢解き」のような構造をとつてはいない。これは、死者の復活を願う殯宮の世界に関わることであつたと思われる。招魂儀礼の結果、死者の魂は生者のもとを訪れる。このことは夢に見えたとき確信的なものとなる。したがつて、夢は招魂の目的に合ったものとして確認されればよいことになる。そのような招魂の目的に対応するものとしてうたわれるのが「玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 我が恋ふる」である。そして、併せて、どうしようもなく心魅かれる状態を死者の魂にうたいかけたものとみることができよう。

四

これまで、夢を解くことを中心に「夢に見ゆ(る)」の歌について考えてきたが、これらの歌の殆どは男女の恋の歌の贈答においてうたわれたものであることを考えねばならない。

男女の恋の贈答歌は、折口信夫のいうように、男の求愛の歌と女のはぐらかしの歌を基本として成つてゐる。これは歌垣の歌謡の掛

け合いに淵源する。高木市之助氏は歌垣の歌謡の本質として「闇を見出され<sup>18)</sup>、森朝男氏はさらにこれが万葉歌の〈凶暴性〉にもつながると規定された。歌といふことはの闘いのなかに夢についての受けとめ方や習俗も取り込まれ、万葉歌の側から捉え返されてくることになる。

15 門立てて戸もさしたるをいづくゆか妹が入り来て夢に見えつる  
(卷十二・三三七)

16 門立てて戸はさしたれど盗人の掘れる穴より入りて見えけむ  
(卷十二・三三〇)

という一組の歌々は相手の姿が夢に見えることをめぐつての問答歌である。15は「門立てて戸もさしたるをいづくゆか妹が入り来て」に夢の不可解さ、不可思議さが踏まえられ、それを解こうとする働きかけと一応はみることができ。16では、問答歌の常として、「門立てて戸はさしたれど」のように、15の句を受ける。そして、その問いかけに対して、「盗人の掘れる穴より入りて見えけむ」と答えるかたちで、その夢を解いてみせる。しかし、この答えは、諸注の指摘するように、遊戯性に富むものと思われる。どこから入ってきたのかという問いかけに対する、盗人の掘った穴からというところに答える意外さ、巧みさがあり、そこを競うかたちで歌による闘いが行われている。そうだとすると、「門立てて戸もさしたるをいづくゆか妹が入り来て」という、夢を解こうとする働きかけの問いも、このレベルにおいて捉えられることになり、「夢に見えつる」も恋愛における実体験という事実そのものを表しているとは考えにくい。そうでありながら、先に述べたように、その底流には夢を解こうとする方向性が存している。あくまで、男女の恋歌の贈答の側

からの捉え返しであるが、その底流には夢をめぐつての観念や習俗が存しているのである。

17はねかづら今する妹を夢に見て心の内に恋ひ渡るかも

(巻四・三三)

18はねかづら今する妹はなかりしをいづれの妹そそこば恋ひたる

(巻四・三三)

は大伴家持と童女との夢をめぐつての贈答歌である。やはり、この歌も遊戯的な恋歌の贈答であらう。17は相手が夢に見たことを解こうとすることを直接うたうものではなく、それを踏まえてそこから引き起こされる恋心をうたうものである。「夢に見て」は、下の句とのつながりからいえば、不可思議な夢の会いを強調するものとなっており、そのことによつて自らの恋心が誘い出されていったことを印象づけている。このような恋の贈答歌における遊戯性は、鈴木日出男氏、高野正美氏などの説かれるような社交的機能を有する恋歌の性格に起因するものであらう。しかし、だからといって、この「夢に見て」の句は単なることばの上でのものではない。そこには、やはり夢が真実なるものであり、また不可解、不可思議なものとして受けとめられていたことがある。その姿を夢に見て、それを相手に伝えたとき、相手の側も自らの心の働きの不可解、不可思議であることに心づき、動搖する。この歌のことばがそのような重みをもっているからこそ、18のうたい手は、「はねかづら今する妹はなかりしを」のように、鋭く切り返したのではなかつたらうか。このようなところに、夢に見たことを相手に伝え、それをより積極的に現実化しようとする動きががちづくられたと考えられる。

また、「——ば」という確定的条件句をもつ歌の形式も、このよ

うな恋歌の贈答のレベルにおいて捉えられよう。

19朝髪の思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける

(巻四・三三)

20葦垣の外にも君が寄り立たし恋ひけれこそは夢に見えけれ

(巻十七・三七七)

や1・4などがこの例である。

このうち、1は「我が背子がかく恋ふれこそ」、19は「かくばかりなねが恋ふれそ」とあつて、それぞれ相手からの求愛・思慕の歌を受けたものであることは明らかである。1は湯原王の歌(巻四・三三)を受けた娘子の歌。19は、その贈歌は失われているけれども、左注に「右歌報賜大嬢進歌也」とあることから、坂上大嬢の贈歌を受けた大伴坂上郎女の歌であることが知られる。これらはいずれも、その贈歌が恋慕することを表し、またはそのように想定されるものであり、それを受けてのものといえる。このことから、うたい手が相手を夢に見てそれを解き得ず不安定な状態のとき、その相手から贈られてきた歌によつて意味づけすることができ、夢の現実への符合の確認を相手に働きかけたものというように想定してみることができよう。そして、これらの歌は、このようなあり方を踏まえつつ、恋の遊戯的な贈答歌としてうたわれていると考えられる。夢に見えることの理由を確定的な言い方でうたう、「——ば」形式の歌には、4のような例もないわけではないが、その多くが相手からの歌を受けてのものであつた。このことからすれば、このような形式の歌は恋歌の贈答のレベルにおいて生まれてきたとみていいのではなからうか。

さらに、6のような、その地が夢に見えることをうたうことによ

って、心魅かれることを強調した土地讚めの歌は、万葉集では他に例がみえないことからすれば、盛んにうたわれたものではなかったらしい。やはり、これもまた、恋歌の類型が踏まえられてのものではなかったらうか。

また、9のように、夢を解くことなくその事象そのものを投げ出して見ているようにみえる歌も、「かきつはた」のような植物を女性の譬喩とするという譬喩歌の方法を前提として詠出されたもので、贈答の双方において歌、そして夢の意味が了解されている。したがって、万葉の相聞の歌には夢に見えろという事象と夢解きの部分とが問いと答えのかたちで二首に分かれているものを見出すことができな

結

以上、「夢に見ゆ(る)」の歌をめぐる夢を解くことを中心に考えてみた。

このような歌は、古代における夢の観念や夢解きの習俗の方向性、あり方をその基底に含み込んでいる。

「夢に見ゆ(る)」の歌は男女の恋歌、またはそれに準じるものとして類出する。これは、人間の男女の恋愛が神婚に倣うものであり、夢が神の憑依(そして幻想としての神婚)と深く関わることによるところが大きいであろう。そしてこれに加えて、夢の現実との符合の確認への方向性と恋の歌の闘いの方向とがうまく重なり合っていることが関わっているのではないだろうか。

なお、中古の文学には、西村亨氏の指摘されるように、望ましく思われるような夢の場合、積極的に恋の相手に夢語りすることによ

ってそれを現実化してゆこうと働きかけるのがみられるが、これは万葉恋歌の「夢に見ゆ(る)」とうたう社交的な贈答の世界が中古の和歌世界に受け継がれ、さらにその周辺にまで広がりをみせたことによるのであろう。

注(1) 大久保広行「夢」(『国文学』第十七巻第六号 一九七二年五月)など。

(2) これらのものなかには、「夢にし見ゆる」「夢に見えつる」「夢に見えけり(る・れ)」「夢に見えこそ」「夢に見えきや」「夢に見えつ」「夢に見て」のような類句が頻出する。

(3) この「夢に見えつ」は、古にありけむ人も我がごとか妹に恋ひつつ寝ねかてすけむ(巻四・四七)

玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山路越ゆるむへに云ふ「夕霧に長恋しつ寝ねかてぬかも」(巻十二・三九三)の「恋ひつ」「長恋しつ」に類似するとみられる。

(4) 多田一臣「おもひ」と「こひ」と(『語文論叢』第十六号 一九八十年十月)「万葉歌の表現」(一九九一年)は、「しのひ」を、対象に強く支配されることによつて、心が真直ぐに対象に向けられてしまう状態をいうとする。

(5) 多田注(4)論文は、「こひ」を「おのれの魂が対象によつて吸引され、支配される状態」と捉えている。

(6) 古代文学会六月例会(一九九一年六月一日)発表時の際の指摘による。

(7) 「古代人と夢」(一九七二年)。

(8) 菅原昭英「古代日本の宗教的情操(1)(2)」(『史学雑誌』第七十八編第二・三号 一九六九年一月・二月)。

(9) 「古代の恋愛生活」(一九八七年)。

(10) 出石誠彦「支那神話伝説の研究」(一九四三年)は漢籍の説話のなかにこのような観念を見出した。

(11) 直話による。根間氏の成巫過程における夢の報告・考察については松浪久子「宮古カンカカリヤの成巫譚」(『奄美沖繩民間芸芸研究』第十三号 一九九〇年七月)・同「カンカカリヤ」(『宮古島巫現』の成巫譚)(『大阪青山短期大学紀要』第十七号 一九九一年三

- 月)がある。なお、宮古諸島のカンカカリヤの事例については佐々木安幹『シャーマニズムの人類学』(一九八四年)など、奄美のユタの事例については山下欣一『奄美のシャーマニズム』(一九七七年)などが詳しい。
- (12) なお、垂仁記の夢のように、託宣の意味をさらに解くために卜占を行おうというものもあって、漢籍の場合と同じである(出石誠彦注(10)書)。なお、このト占の重要性については、岩田勝『日本歴史と芸能』第八卷「修験と神楽」一九九〇年)が指摘している。
- (13) たとえば『新撰龜相記』には亀卜の兆が載せられている。
- (14) 『古代歌謡論』(一九八二年)。
- (15) 『古代歌謡論』(一九八二年)。
- (16) なお、「夢に見ゆ」に類する表現として「面影に見ゆ」があげられるが、このような構造をもつ歌は一首もない。
- (17) 清水章雄「らし」(『古代語誌』一九八九年)・斉藤英喜「逆言・狂言と挽歌」(『セミナー古代文学88』一九八九年十一月)。
- (18) 大久保広行注(1)論文。三浦佑之「万葉集の夢」(『成城万葉』第十七号 一九八〇年十一月)は夢が挽歌にうたわれることや殯宮の籠りの夢について考察している。
- (19) 『古代研究 国文学篇』(一九二九年)など。
- (20) 『古文芸の論』(一九五二年)。
- (21) 『古代和歌と祝祭』(一九八八年)。
- (22) 『萬葉集古義』・『萬葉集全釈』・『萬葉集評釈』・『萬葉集私注』・『萬葉集全註釈』・日本古典文学全集『萬葉集』・新潮古典集成『萬葉集』・『萬葉集全訳注・原文付』など。なお、『萬葉童蒙抄』は「今の風體には不可好體也」というが、これはその戯笑性についていっただものかもしれない。
- (23) 『萬葉集私注』・『萬葉集注釈』・日本古典文学全集『萬葉集』・『萬葉集全注』など。
- (24) 『家持の相聞歌』(『論集上代文学 第九冊』一九七九年)。
- (25) 『社交歌としての恋歌』(シリーズ古代の文学7『古代詩の表現』一九八二年)『作者未詳歌の研究』一九八二年)。
- (26) 猪股ときわ「歌のへこころ」と無心所着歌」(『古代文学』第二十号 一九八七年三月)・「へこころ」(『古代語誌』一九八九年)・野田浩子「神」とへこころ」(『東横国文学』第二十一号 一九八九年三月)・「景」あるいは「物」とへこころ」(『古代文学』第二十二号 一九九〇年三月)・「属物」歌考」(『東横国文学』第二十二

号 一九九〇年三月)などは、心の動きの不可解さ、不可思議さに注目し、心が神の側に属するものであると論じている。  
 (26) 『王朝恋詞の研究』(一九七二年)。